〈特集：大都会の高齢者〉

都市の老人

新津　ふみ子　（ケア・コーディネーション研究所）

新宿区の大久保通りを国際通りという．日本語，中国語，韓国語，英語，4ヶ国があたり前のように飛びかう．

この大久保通りに夢広場というパチンコ店がある．夕暮れ時，この店の前で一組の老夫婦とすれちがった．仕立てのしっかりしたコートを着ている．

夫が杖をつき，妻も後にひかえ，少しばかり危気な足取りである．夫の表情のうつろさに外出好きのボケ老人に妻が付きそっているのかもしれないと思ったが，後にひかえた妻の表情も今いちしゃっきりしない．もしかしてボケているのは妻の方で，妻の徘徊に夫が付き合っているのかもしれないとも思えた．

新宿区，約27万強の人口，高齢化率13.7%，全国の平均をこえている．騒然とした繁華街のど真ん中にも老人立ちは存在する．今や普通の姿なのである．

都市に住む老人がケアの受け手になった時にはどんな生活になるのだろうか．

たとえば社会資源の豊富さ，公的民間サービスは地方よりも平均的には多いだろう．それらは便利な生活を保障し，楽しみ方も，楽しみの場所も田舎よりは多いかもしれない．一方，近所との付きあいなどを考えると，必ずしも支え合っているとはいいがたい．とはいえ，他人に気使いをしないですむ気楽さがあり，気ままな生活もできる．

家族へ依存できない一人暮しの人などは，時として多くの社会資源を利用し，新しい人との出会いが緊張感をもたらし，精神生活を活性化したりもする．

これから紹介する2人のご老人は，訪問看護で出会った人である．

1人は，財産を食いつぶし，20年程前から生活保護受給者となり，公営住宅に住んでいた姉94才，弟76才の二人暮し，今は二人共この世に存在しない．

2人目は，母親と娘の二人暮し．母を介護するため退職したが，友人達の度々の訪問と年1～2回の旅行，そして週1回デパートで買い物を楽しみながら，介護を日常生活の中にとけこませ，豊かともみえる日々を送っている．

事例-1．姉弟が選んだ在宅死と病院死

ある日弟がトイレで倒れ，動けなくなった．福祉事務所のケースワーカーが近所の医師に往診を依頼したところ，血圧が200mmHgもあり，すぐ入院をすすめた．しかし弟は拒否した．医者嫌い，病院嫌いなのである．他人の指示に従えないのである．弟は幼い時から病弱であったが，経済的に恵まれた家庭に育ったため，働く必要もなく，母の死後，未婚の姉にめんどうをみてもらっていたのである．いつの間にか2人共老人になってしまったが，弟は他人と馴むという経験がなかった．本当に子供のように自分のしたいことを話すだけなのである．

ケースワーカーは訪問看護を紹介した．「家に来てくれるならいい，入院をすすめないのならいい」といって私たちは受けいれられた．

姉は高齢であり，弟と自分の食事を作るので精一杯である．それも，弟の食事は彼の好きな，所望のあった料理を何十年にもわたり作り続けている．「わがままで困った子供のようです」とくり返すのだが．

ホームヘルパーが週2回訪問し，家事を中心に援助をしている．

訪問看護は当初，週1回だったが，すぐに適宜の訪問週2回以上に変った．度々ころんで身体に傷が残り，食欲は落ち出し，きわめつけは下痢である．トイレ，寝具，寝衣の汚染，清拭にふりまわされ，姉を始めとし，全員が一時避難所として病院を選んだ．弟は姉の説得に応じたが，入院期間は10日しかもたなかった．病院は煩くて眠れない．かえって身体を弱らせてしまうというのである．下痢は止り，食欲も出たので退院させざる得なかったのだが，姉はがっかりしていた．

しばらくの間弟の調子も昇りかげんであったが，今度は姉の病気である．腰が痛くて動くのが困難になった．弟は姉はわざと痛がって，自分の食事を作らない

と言って店屋物を拒食し，部屋に閉じこもり出した．近所の人が持ってくるおすそわけの惣菜にも手をつけない．姉は自分が入院するといえば弟も応じると思ったが当がはずれ，一人でも生活はできると弟はいい切った．

姉の痛みは増し，歩行不可能となり，姉は一人で入院した．よほど苦しかったに違いない．

弟の一人の生活が始まった．

ホームヘルパー週2回，その他の曜日は訪問看護婦が担当し，日曜日は近所に住む知人に定期訪問を依頼した．主治医も紹介したが，入院をすすめないことを確認し合った．

弟はどうにかまだトイレまでゆける．まさに綱渡りの毎日であったが，そんな時，同じ公営住宅に住む2階の若い人が，区に訴え出た．寝たきり老人を一人にしておいていいのか，死んでいたらどうするというのである．福祉事務所のケースワーカーと訪問看護婦は，自治会長を訪ね今後の対策について検討した．本人の意志は固い．その意志に添うことが人の努めであるという自治会長の見解に心おどった．励まされた．

この若い人の家にも説明に伺ったが，若い夫はテレていた．妻が恐がるのでと，その気持ちを語った．自治会長，民生委員，近所の人たちの訪問がふえた．何とこの若い夫婦も訪問し出したのであった．

姉が入院して2ヶ月たっただろうか，弟の体力は弱り，食欲も落ち，寝ている生活が多くなり，背部に発赤，褥瘡の始まりである．弟の4畳半の部屋から介護のしやすい6畳に移ってもらった．吸いのみを枕元におくようになってから3日後，朝，知人の訪問で弟の死亡が発見された．緊急連絡網を作成しておいたが，第一の連絡者は訪問看護婦の自宅と主治医である．114番，救急車は記していない．

日曜日の朝7時半，主治医と同時に到着．連絡を受けてから15分のことである．

弟は眠っている．穏やかだ．まだ温かい．主治医による死亡確認の後，自治会長に報告した．近所の人達が集まり，葬儀の準備が始まった．もう医師も区役所の人間である訪問看護婦もいらない．地域の人達におまかせである．

通常，都市における一人暮しの死を孤独死といい，社会福祉の立ち遅れとして避難される．たしかに，この人へのかかわりをふり返る時，帰り際「どうしてもっと長い時間ボクのそばにいられないの」と背中にあびせられた言葉に立ち止まってしまった自分を思い出す．毎日訪問したといっても，1日2時間程度，ターミナルになってからは，朝・夕の2回だけである．彼は確かに孤独だったに違いない．

私たちは現状の中であらん限りの力を発揮したというよりは，この人に引きずられ，後追いをしていたにすぎない．おかげ様で数多くの新しい学習ができ，ネットワークはできたのだが．

ふと思っている．都市の方が自己主張をうけいれているのではないか．他者の自己主張に従うとは，関係において一定の距離が必要であり，もしかしたら孤独と孤独の対決ではないかと．

姉のその後である．腰痛の原因は肺ガンの転移によるものであった．入院先は老人の多い一般病院であるが，できる限り良い病院を選んだし，窓口担当のケースワーカーとも交流があり，無理をきいてもらえる．弟死亡後，2週間程して病院を訪れた．姉はそばに座っている付きそい家政婦さんにすっかり世話になっている．「良くしていただいている」とまずほめた後，弟の安否を問う．「はい変らずに」としか答えられなかった．弟の死を姉には誰も教えていないのである．

「皆さんにご迷惑をかけているでしょうね」と訪問看護婦の顔を見る．「いいえ」と答えたら，「もしかして死んだのではないですか」と言う．黙っている看護婦の顔をもう一度見，「やっぱりそうなのですね，あきらめていましたから」と天井をみた．そして目を閉じてしまった．看護婦の口からもう言葉は出ない．深く黙礼をして退室した．

それから2ヶ月後姉は死んだ．手術もせず，やたら処置もされず，眠るようにだったと聞いた．付きそい家政婦による看とりであった．

身内のいない人は，入院し他人に看とられる．これもまた都市の老人の姿である．

事例-2．都市の便利さを上手に利用して

母親と娘に始めて会ったのは母親が入院している病棟である．娘から訪問看護の依頼があった．母を退院させるが尿管カテーテルを挿入しているし，寝たきりなので在宅看護について教えてもらいたいというのである．婦長さんの説明では肺ガンで骨転移もあり，度々

症状の悪化をくり返したが，放射線治療の効果も表われ現在病状は安定している．退院は可能だったが，介護者が日中不在のため入院が長びいていたのだという．娘は母の介護のため退職したというが，58才でありあと2年働いても同じことだから，むしろ母の介護を選んだのだと，その顔はすっきりしている．

でも母親は違う．3年程の入院生活ですっかり病人になっていた．医師，看護婦がそばにいない生活は不安なのである．誰がカテーテルの交換をするのか，測った熱は誰に報告するのか，熱が出た場合はどうするのかなど，事細かく退院後の生活について質問する．丁寧に，具体的に自信をもって説明したのだが表情は硬い．お母さん私が看護婦さんに相談してちゃんとするからと娘はくり返す．

ところが退院した次の日から母親の表情は変った．笑顔になったのである．料理が美味しくて全部食べたと報告し，ベット上での半座位も事の外時間が長くなっている．

週1回の訪問日，娘は療養ノートをみせてくれる．血圧，体温，脈拍を1日2回測り，食事の量，尿量，排便の他，足にけいれんがおきたなど特に変ったことを書きこみ，病人の変化がよくわかる．また，介護も家事もなるべく集中して行い，自分の自由時間を作っているのだという．その合理性，計画性に脱帽した．

母親の足元にあるサイドテーブルの上には，みごとな花が生けてある．まあ，ゆりですか，良い香りですねと語ったら，いいえこれはカサブランカというんですよと母親に教えられる始末．

訪問のたびに花が変っている．四季折々の花，豪華な洋花から野の草花まで，必ず母親が説明してくれる．その声は生き生きとし，いつも笑っている．

そして，もう一つの楽しみが待っていた．美味しいお茶菓子である．デパートの食品売場で，東京では簡単に手に入らない和菓子をみつけたという．そして疲れた時にいいんですよ，といいながら抹茶を立ててくれる．母親も一緒に三人でいただく．

訪問のたびにめずらしいお茶菓子が待っている，これもまた話題の種である．誰からいただいたとか，デパートのどの辺にあったとか，昔はこうだったとか，地方に行った人のおみやげを種に土地，土地の話題に花が咲く．看護婦はずい分と物知りになった．

娘は月に1回，昼食時に友人と待ち合わせグルメを楽しむ．そして必ず母親におみやげを買ってくる．始め2時間ばかりの不在を母親は不安がり，知人に留守をたのんでいたが，もういらない．時計をみながら，10分帰りが遅れると，あら遅いじゃないと一言挨拶はするが，母親はしっかりと待てるようになっていた．そして来月はどこに食べに行くのかと，テレビで耳にした店の名前を指名することもある．

退院して4年になる．この間，肺炎をおこして入院したり，娘が病気になり精査のため入院し，母親も付き添って入院しているが，いずれも2週間で退院している．

四季折々の花を生け，めずらしいお茶菓子をさがす日々はまだ続いている．

親族も近くにいて交流はあるが，親子二代でけじめをつけたいといい，一人残るだろう娘は老後の生活設計に余念なく，お墓の準備にも万全を期してある．

そして二人は，主治医の病院に死後の解剖を依頼し，献体届けをすましている．なるべく親族に迷惑をかけず，さっぱりしたいのだという．

女二人健気に生きているといっては，失礼かもしれない．自分らしく今ある生活を享受し，最高に楽しんでいる．そう今に生きる人達なのである．

都市には何でもある．楽しもうと思えば簡単に手に入る．便利だ．

30分の時間があると本屋にとびこむ．最近街の中に本屋がふえた．金曜日，土曜日はオールナイトで映画がみられる．ワンカップもビールも，ウイスキーだってコインスタンドで真夜中でも，早朝でも買える．24時間のコンビニエンスストアーには主食，主菜，副食が全部そろっている．弁当を温めてさえくれる．そのうち電動車椅子に乗った老人がコンビニエンスストアーにも現れるような気がする．

ふと思った．都市には自立の条件があるのではないかと．